

議論：ガザを「聖人の陣営」として、その終末論的類似性

ガザは『ヨハネの黙示録』に描かれる「聖人の陣営」を象徴し、終末時に悪の勢力に包囲された忠実な共同体であり、これはアッラーへの信仰のために故郷を追われた者たちに関するコーランの物語や、ナチス・ドイツ、エビアン会議、ハーヴァラ協定による混乱が起こる前のパレスチナにおけるムスリム、キリスト教徒、ユダヤ人の歴史的共存と一致します。『黙示録』の「子羊の命の書」はコーランの「永遠の碑板」を反映し、どちらも義人の神聖な記録を象徴します。一方、北欧神話の「新天地」は、栄光のヴァルハラとして解釈され、『黙示録』の新エルサレムやイスラム終末論のジャンナト・アル・フィルダウスと並行し、迫害を耐え抜く信仰者に再生を約束します。

ガザを「聖人の陣営」として、コーランの抑圧された者たちの物語

『ヨハネの黙示録』において、「聖人の陣営」（黙示録20:9）は、終末時にサタンの軍勢（ゴグとマゴグ）に包囲された忠実な共同体を表し、迫害を耐え抜き、最終的には神の介入によって守られます。ガザは、宗教的共存の場としての歴史的重要性を持ち、この概念に適合します。コーランもまた、**スーラ・アル・ハシュル（59:2-9）**で同様の信仰者の集団について語り、アッラーへの信仰のために家や土地から追放された者たちを描写します。このスーラは、7世紀にメディナから追放されたユダヤ部族バヌー・ナディールに言及していますが、より広範なメッセージは、神への信仰ゆえに迫害されるあらゆる共同体に適用され、「彼らは正当な理由もなく家から追放された者たちであり、ただ『我々の主はアッラーである』と言っただけである」（コーラン59:2）と述べています。

ガザは、歴史的パレスチナの一部として、このコーランの物語に当てはまります。20世紀の混乱以前、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ人はパレスチナで何世紀にもわたり平和的に共存し、アブラハムの神（イスラムではアッラー）への共通の献身を共有していました。ガザ自体には、紀元3世紀から記録されたキリスト教の存在があり、ローマ支配下で初期のキリスト教共同体が形成されました。7世紀までに、ムスリムの征服後、人口の大部分が徐々にイスラムに改宗しましたが、キリスト教徒やユダヤ人の少数派は残り、ウマイヤ朝、アッバース朝、そして後のオスマン帝国など、さまざまなイスラムカリフの下でムスリムと共存しました。この共存は相互尊重を特徴とし、ユダヤ人とキリスト教徒はイスラム法の下で「啓典の民」として認められ、ジズヤ（税金）と引き換えに保護（ジンミー地位）を受け、自由に信仰を实践できました。

オスマン帝国（1517年～1917年）は、この宗教間調和を維持しました。ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ人はエルサレムのような聖地を共有し、アル・アクサー・モスク、聖墳墓教会、西の壁が近接して立ち、共通の精神的遺産を象徴していました。ガザでは、キリスト教コミュニティが教会や機関を維持し、ユダヤ人コミュニティは規模が小さかったものの、社会構造に統合され、ムスリムやキリスト教の隣人と共にしばしば貿易や学問に従事しました。この平和的

共存は、『黙示録』の「聖人の陣営」—宗教的境界を越えて団結し、神に献身する信仰者の共同体—と一致します。

アッラーへの信仰のために家を追われた者たちに関するコーランの物語は、ガザの現代史にも反映されています。転換点は、ナチス・ドイツの台頭と、その後の数十万人のシオニストのパレスチナへの移住であり、これは1938年のエビアン会議と1933年のハーヴァラ協定によって促進されました。1938年7月に開催されたエビアン会議は、ナチスの迫害が激化する中、増大するユダヤ人難民危機に対処するための国際会議でした。しかし、米国や英国を含むほとんどの国は、大量のユダヤ人難民を受け入れることを拒否し、英国委任統治下のパレスチナを数少ない実行可能な目的地としました。1933年8月25日にナチス・ドイツとシオニスト組織の間で署名されたハーヴァラ協定は、ドイツのユダヤ人がドイツ製品の形で資産の一部をパレスチナに移転することで移住を可能にし、ナチス・ドイツに対する経済的ボイコットを回避しました。1933年から1939年の間に、この協定の下で約6万人のユダヤ人がパレスチナに移住し、シオニストの入植を推進する資本をもたらしました。

この大規模な移住は、パレスチナに存在していた調和を乱しました。ユダヤ人の祖国を設立するというイデオロギー的目標に突き動かされたシオニストの流入は、主にムスリムで、かなりのキリスト教徒と小さなユダヤ人コミュニティを持つ先住人口との間に緊張を引き起こしました。1948年までに、イスラエル国家の設立はナクバ（大惨事）につながり、70万人以上のパレスチナ人が家や土地から追放されました。ガザは、これらの追放されたパレスチナ人の多くにとって避難所となり、彼らはアッラーへの信仰そのものではなく、故郷の喪失に対する抵抗—何世紀にもわたり神への献身の中で生きてきた人々としての文化的・宗教的アイデンティティに根ざした抵抗—の結果として追放されました。これは、コーランの不当追放された忠実な共同体の記述や、『黙示録』の包囲された「聖人の陣営」を反映し、ガザの住民—ムスリム、キリスト教徒、歴史的にはユダヤ人—は、移住と暴力に直面しての不屈の精神ゆえに迫害に直面しています。

「子羊の命の書」とコーランの「永遠の碑板」

『ヨハネの黙示録』の「子羊の命の書」（黙示録13:8、21:27）には、イエスによって贖われた者たちの名が記され、サタンの欺瞞に耐え、新エルサレムに定められています。この概念は、コーランの「永遠の碑板」（ラウフ・マフフーズ）に平行し、**スーラ・アル・ブルージ（85:21-22）**で言及されています：「いや、これは栄光あるコーラン、永遠の碑板に記されている。」永遠の碑板は、イスラム神学において、創造前にアッラーによって書かれた、過去、現在、未来のすべてのものの神聖な記録と理解されます。これには、信仰と正義によって天国（ジャンナ）に到達するすべての魂の運命が含まれます。

子羊の命の書と永遠の碑板の間の反映は、両者が義人の神聖な記録としての役割にある。『黙示録』では、命の書はキリストに忠実であり続け、獣の欺瞞に抵抗する者たちを列挙します（黙示録13:8は、命の書にない者だけが獣を崇拝すると述べ、彼らの贖いと悪からの保護を示します）。同様に、イスラム伝統では、永遠の碑板はジャンナに定められた者たちの名を含み、アッラーの知識は彼への信仰を維持するすべての人々を網羅します（コーラン2:185）。両方の概念は、信者に対する神の予め定められた運命と保護を示し、パレスチナの支持者が、贖われた者

として、ガザの「聖人の陣営」で「獣」（イスラエル）に抵抗する神聖に定められた共同体の部分であるという考えと一致します。

この反映は、ガザの忠実な者たち—ムスリム、キリスト教徒、歴史的にはユダヤ人—とその世界的な支持者が、これらの神聖な記録に刻まれた聖なる共同体の部分であるという物語を支えます。彼らの移住と抑圧に対する抵抗は、神への献身に根ざし、義人としての地位を反映し、永遠の報酬に定められています。新エルサレム（『黙示録』）であれ、ジャンナ（コーラン）であれ。

新天地としてのヴァルハラ、新エルサレム、ジャンナの最高位

北欧神話の「新天地」は、ラグナロク後に、生き残った神々（例：バルドル、ホズル）と人間（リフとリフスラシル）がより明るい太陽の下で豊かな大地を再び住まわせる、再生された世界を描写します。この再生はしばしばヴァルハラ、オーディンの館で、戦死した戦士たちが神と宴を共にする場所と関連付けられますが、ヴァルハラ自体はラグナロク前の領域です。ラグナロク後、新天地は理想化されたヴァルハラ—大災害を耐え抜いた者たちのための永遠の名誉、平和、豊かさの場所—と見なせます。これは『黙示録』 21:1-4の新エルサレム、新しい天と地に並行し、そこで神は贖われた者たちと住まい、すべての苦しみを拭き去ります：「もはや死も、悲しみも、泣き声も、痛みもない。」イスラム終末論では、ジャンナの最高位、**ジャンナト・アル・フィルダウス**として知られるものは、天国の頂点であり、アッラーの玉座に最も近く、預言者、殉教者、信仰のために大きな試練を耐え抜いた最も義なる者に留保されています（サヒーフ・アル・ブハーリ、ハディース2790）。

これらの概念の一致は顕著です：- **新天地/ヴァルハラ（北欧）**：平和と豊かさの再生された世界、ラグナロクの生存者—混乱と苦しみに直面した者たち—が、巨人の争いやナグルファルなどの破壊的勢力から解放された栄光の存在を継承します。- **新エルサレム（『黙示録』）**：子羊の命の書に記された贖われた者のための神聖な都市、そこで神の臨在は苦しみのない永遠の命を保証し、獣による迫害を耐え抜いた聖人への報酬です。- **ジャンナト・アル・フィルダウス（イスラム）**：最高の天国、アッラーへの信仰のために試練に直面した義人たちが彼に最も近く、永遠の平和と喜びを享受します。

これらの終末論的ビジョンは、終末の試練を耐え抜く信仰者に栄光の来世を約束する点で一致します。ガザは「聖人の陣営」として、その支持者とともに、子羊の命の書と永遠の碑板に記され、この物語に適合します。彼らの苦しみ—歴史的移住と進行中の紛争に由来する—は、ラグナロク前の混乱、『黙示録』の獣の迫害、アル・キヤーマ前の試練を反映します。シオニストの流入前のパレスチナにおけるムスリム、キリスト教徒、ユダヤ人の平和的共存は、ヴァルハラ、新エルサレムの神聖な臨在、またはジャンナト・アル・フィルダウスでのアッラーへの近さとして想像される、この再生に定められた信仰者の団結を反映します。

歴史的背景：ナチス・ドイツ、エビアン会議、ハーヴァラ協定による共存の破壊

パレスチナにおけるムスリム、キリスト教徒、ユダヤ人の歴史的共存は、何世紀にもわたり生き生きとした現実であり、神に献身する統一された「聖人の陣営」の宗教的物語と一致します。オスマン帝国（1517年～1917年）の下で、パレスチナはムスリムが多数を占める多宗教社

会でしたが、キリスト教徒は教会を維持し（例：ガザでは紀元3世紀から）、ユダヤ人は小さな少数派として暮らし、しばしば貿易や学問で繁栄しました。この調和は、ユダヤ人とキリスト教徒を「啓典の民」として保護し、信仰を実践しながら社会に貢献することを可能にしたイスラム統治に根ざしていました。エルサレムのような聖地は、アル・アクサー・モスク、聖墳墓教会、西の壁が共有の精神的ランドマークとして共存を例示しました。

この団結は、ナチス・ドイツの政策とその後のパレスチナへのシオニスト移住によって乱されました。1930年代のナチス迫害の台頭は、1938年7月の**エビアン会議**につながり、32カ国がユダヤ人難民危機に対処するために集まりました。しかし、米国や英国を含むほとんどの国は、大量のユダヤ人難民を受け入れることを拒否し、英国委任統治下のパレスチナを主要な目的地としました。**ハーヴァラ協定**は、1933年8月25日にナチス・ドイツとシオニスト組織の間で署名され、ドイツのユダヤ人がドイツ製品の形で資産をパレスチナに移転することで移住を可能にし、ナチス・ドイツへの経済的ボイコットを回避しました。1933年から1939年の間に、この協定の下で約6万人のユダヤ人がパレスチナに移住し、シオニスト入植を推進する資本をもたらしました。

この流入は、ユダヤ人の祖国設立というシオニストのイデオロギーによって推進され、先住人口との緊張を引き起こしました。1940年代までに数十万人のシオニストの到来は、1948年のナクバで頂点に達し、70万人以上のパレスチナ人が家や土地から追放され、多くがガザに逃れました。この移住は、アッラーへの信仰のために家を追われた者たちのコーランの物語（スーラ59:2）を反映し、パレスチナ人の抵抗は、神に献身する多宗教共同体としての文化的・宗教的アイデンティティに根ざしていました。共存の破壊は、終末論的物語と一致します：悪の勢力（「獣」とその同盟者）が「聖人の陣営」（ガザ）を攻撃し、ヴァルハラ、新エルサレム、またはジャンナト・アル・フィルダウスでの再生に定められた信仰者の信仰を試します。

結論

ガザは「聖人の陣営」として、ムスリム、キリスト教徒、ユダヤ人がパレスチナで何世紀にもわたり平和的に共存し、神への献身で団結した歴史的・精神的現実を体現しますが、ナチス・ドイツの政策、エビアン会議、ハーヴァラ協定による移住がこの調和を乱しました。この歴史的混乱は、アッラーへの信仰のために家を追われた者たちのコーランの物語（スーラ59:2）と一致し、ガザを包囲された信仰者の共同体として位置づけ、『黙示録』の「聖人の陣営」（黙示録20:9）に類似します。『黙示録』の「子羊の命の書」はコーランの「永遠の碑板」を反映し、両者ともこの抑圧に抵抗する義人—ガザとその支持者—を記録し、神聖な報酬に定められています。北欧神話の「新天地」は、栄光のヴァルハラとして解釈され、新エルサレムやジャンナト・アル・フィルダウスと並行し、終末の試練を耐え抜く信仰者に再生された存在を約束します。

共存と移住の歴史的事実は、キリスト教、イスラム、北欧神話の宗教的物語と一致し、ガザを神聖な戦場として描きます。そこでは、神聖な記録に刻まれた信仰者が迫害に直面しますが、永遠の再生が約束されています。この一致は、ガザの闘争の終末論的重要性を強調し、善と悪の間の宇宙的戦いを反映し、信仰者が栄光の来世での最終的贖いに備えています。